次回の定期演奏会をちょっと予習

山野雄大

第188回定期演奏会

一般発売1/26［会員先行1/24.25］

2022年3月17日（木）17:45開場　18:45開演
三井住友海上しらかわホール
指揮/角田鋼亮（当団常任指揮者）
萩森英明：Novelette for Violette On a Theme by Scarlatti
ラフマニノフ：コレルリの主題による変奏曲ニ短調Op.42
（編曲：ダンブラヴェヌー）
エルガー：創作主題による変奏曲「エニグマ」Op.36

本年最初の定期は、名誉指揮者であるマエストロ小松長生をお迎えして、チェコの傑作たちをお楽しみいただいておりますが・・・・次回定期は3月17日、我らが常任指揮者・角田鋼亮と共に（これまた面白い！）プログラムをお聴きいただきます。

なにが面白いといって、3曲ならぶ演目がすべて〈変奏曲〉なのです。――世に有名な変奏曲も数あれど、マエストロ角田とセントラル愛知響が選んだ次回の3曲は、他では体験できない組み合わせ。美しい曲ばかりですので、どんな作品たちなのかをご紹介いたしましょう。

◆〈変奏曲〉三昧――シーズンの終わりにふさわしく、豪華に！

ひとつの主題（テーマ）をもとに、さまざまな変化をくわえて奏してゆく・・・・ので〈変奏曲〉というわけですが、最初のテーマがどのように姿かたちを変えてゆくのか、その変貌ぶりで聴き手をおっと思わせるのが、作曲家たちの腕のみせどころ。

古来さまざまな作曲家が、いろんなスタイルの〈変奏曲〉を書いてきました。今シーズンの定期をずっとお聴きくださった皆さまなら、マエストロ角田が昨年5月の定期（第182回）で指揮したブラームスの交響曲第4番（終楽章が古い変奏形式で書かれていました）や、7月の定期（第184回）でとりあげたバッハ／ラフ編曲《シャコンヌ》（これこそ古い変奏形式です）など、プログラムの要所に〈変奏の巧み〉が織り込まれてきたことも、お気づきかと思います。そう、次回定期の〈変奏曲三昧〉は、今シーズンの旅路をしめくくるにふさわしい、変貌の魅力を堪能するフルコースというわけなのです。

◆洒落て美しい小品から――すみれの薫る変奏曲

変奏曲三昧の最初は、洒落て美しい小品を。一度きけばその場で口ずさめるような、軽やかなメロディが生まれては流れて・・・・そこに豊かなハーモニーが彩られてゆく、とても親しみやすい音楽です。

《Novelette for Violette On a Theme by Scarlatti》というタイトル、ざっと訳せば〈スカルラッティの主題による《ヴィオレッテのためのノヴェレッテ》〉となりましょうか。――「ヴィオレッテ」とは「すみれ（菫）」という花の名前でもあり、バロック音楽の作曲家アレッサンドロ・スカルラッティ（1660～1725）の書いた歌曲《すみれ（Le Violette）》の題名でもあります。

この古くから愛唱されてきた歌曲のなかにある、シンプルで耳なじみの良い動機（モチーフ）をいくつか取り出して、組み合わせながらさまざまなハーモニーと共に変奏されてゆく、というのが今回の作品。愛らしい音の動きがすっと耳に入ってくる・・・・それでいて、飽かせずわくわくさせてくれる巧みな味つけ。初めてのかたにも、聴き巧者にもそれぞれ愉しんでいただける小品だと思いますので、ぜひご期待ください。

ちなみに《ヴィオレッテのためのノヴェレッテ》という言葉遊びのようなタイトル、前半は元ネタの歌曲を指すとして、後半の「ノヴェレッテ」というのは元々フランス語で「小さな短篇小説」といった意味のことば。19世紀の作曲家シューマンがピアノ曲のタイトルにつけたあたりから、「自由なかたちのロマンティックな小品」を指す曲種の名にもなりました。

この素敵な小品を作曲したのは、1981年生まれの作曲家で、編曲家としても多彩な活躍を繰り広げる萩森英明（はぎのもり・ひであき）さん。詳しいプロフィールや作品の詳細は当日プログラムをご参照いただくとして、検索していただくと世界初演（大友直人指揮MMCJ2017オーケストラ）の映像が公開されていますので、あらかじめ聴いてみたいかたはぜひ。

◆ピアノ曲から色鮮やかに華ひらく――ラフマニノフの珍しい変奏曲

続いてお聴きいただくのは、ロシア出身のセルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）による《コレルリの主題による変奏曲》作品42（1931年）。もとはラフマニノフのピアノ独奏曲です。

ラフマニノフといえば、ピアノとオーケストラのための《パガニーニの主題による狂詩曲》作品43というロマンティックな人気曲がよく演奏されます。あちらも実は変奏曲なのですが、今回お聴きいただくこちらの曲で変奏のテーマに選んだのは、イタリアの作曲家、アルカンジェロ・コレルリ（コレッリ／1653～1713）の、ヴァイオリン・ソナタ ニ短調 作品5-12《ラ・フォリア》の主題です。愁いを帯びた、ゆったりとして荘厳なメロディなのですが――ややこしいことに、これはコレルリのオリジナルではなく、ポルトガル起源の古い舞曲〈フォリア〉から、古来さまざまな作曲家が借用してきたもの。たまたまラフマニノフが、コレルリのヴァイオリン・ソナタを聴いて着想したというだけで・・・・まぁ、そのあたりはお愉しみいただく上で関係のない話です（とはいえ、曲の途中がシューマンのピアノ曲〈ノヴェレッテ〉作品21-8から影響されている、と指摘する研究もあったりして、実は前の萩森作品ともひそかに関連するあたりは面白いところ！）。

次回はこれを、ルーマニアの指揮者コルネリウ・ダンブラヴェヌー（ドゥンブラヴェーヌ）がオーケストラ用に編曲したヴァージョンでお聴きいただきます。原曲のピアノ作品に秘められたものを、想像以上の色彩感でぐいぐい引き出してみせる編曲、まだまだ実演を聴く機会も少ない（日本初演は2013年、クリスチャン・ヤルヴィ指揮の東京都交響楽団でした）貴重な実演、ぜひ体感してみてください。

◆謎が謎を呼ぶ、愉しいステージへ！――エルガー《エニグマ（謎）変奏曲》

さて〈変奏曲三昧〉の最後は、いちばん変わった（しかしいちばん有名な）作品を。その名も《エニグマ（謎）》という変奏曲です。

エドワード・エルガー（1857～1934）といえば、行進曲《威風堂々》や素晴らしい交響曲など、大英帝国を代表する音楽家として名声を博したひと。ヴァイオリン小品《愛の挨拶》（妻となる人へのプレゼントに書かれました）と素敵なメロディを紡ぐひとでもありましたが、《エニグマ（謎）変奏曲》作品36（1898～99年）も、ちょっと不思議な贈り物のように書かれています。

主題に続く14の変奏にはそれぞれ、人物のイニシャルが冠されています。これは、それぞれエルガーの親しい人たちを指していて（たとえば最初の〈C.A.E.〉は愛妻キャロライン・アリス・エルガー）、変奏もそれぞれイニシャルの人物を表現した性格的な音楽となっているのです。

ですから、聴いていると、エルガーをとりまく人たちが舞台へ次々に登場しては去っていくのを観るような（それがどんな人物なのか、音から想像するような）愉しい体験をすることになります。上品な美しさの薫るひともいれば、茶目っ気あふれるひともいて・・・・と、起伏に富んで聴き飽かせない、なかなか洒落た仕掛けですね。

全員の謎解きは当日プログラムの解説にお任せするとして、さらに謎がもうひとつ。エルガーいわく、実は最初に演奏されるテーマだけではなく、さらにその元となった、隠された（演奏されない！）主題がある、というのです。さて、どんな主題だったのだろう・・・・と考えながら聴いていると、曲が胸に入ってこなくなりますので、当日はぜひ無心でこの美しさをお楽しみいただければ。では、次回もこのホールでお会いいたしましょう！

やま の たけひろ
山野雄大

Profile

ライター［音楽・舞踊評論］。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く　昼の音楽さんぽ》司会・構成。